

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

II 待て、何者だ！

ひんやりとした夜の空気に、ニーダマはぶるぶるつと体を震わせて目を覚ましました。少し欠けた月が高く昇っています。ニーダマはしばらくの間、月を見つめていました。ローズンのことを想っていたのです。お城で何かが起こっているのか、それともあの子供が思いちがいをしていたのか……いずれにしても、ローズンのもとへ戻ればまた、幸せな暮らしが待っていることだけは確かなのです。

ニーダマはふーつとため息をつき、膝を抱えました。

静かな夜です。近くを流れる川の音以外には、何も聴こえるものはありませんでした。ニーダマはゆっくりと立ち上がり、太ももをばんばんと叩きました。

「よし、まだまだ歩けるぞ。フィーラのやつがどうやって父上殿に取り入ったのか、城に戻って確かめねばなるまい！」

そうやって自分のことを勇気づけるように大声で言うと、月の明かりと川の音を頼りにして、ニーダマは早足で歩き始めたのでした。

朝焼けが遠いトツカトツカの山の端を桃色に染めるころ、ニーダマの目にようやくエックエックのお城の姿が映りました。体はひどくくたびれていましたが、ひと月ぶりに目にしたお城の様子にニーダマは力を得て、いよいよ颯爽と歩いて行きます。

お城の北門が見えてきました。二人の見張り番は地面に座り込み、ぐうぐうと居眠りをしているようです。あらあら、こんなことで、もしも恐ろしい盗賊でも来たらどうするんでしょうね。

ニーダマは、やれやれ、とつぶやきながらとつても嬉しそうな笑みを浮かべて門をくぐりました。中庭で立ち止まると、朝の爽やかな空気がニーダマの汗ばんだ額をひやりと冷やします。

「待て、何者だ！」

そのままお城の階段を登ろうとした時です。聞きなれない声が、ニーダマの歩みを止めさせました。ニーダマはにこやかに振り返り、そして言いました。

「わたしだよ。しばらく留守にしてみました……」

そこまで言うと、ニーダマは突然口を開けたまましゃべるのを止めてしまいました。そして階段を一步下り、声をかけてきた男の不審そうな眼差しをしっかりと見つめ返して言います。

「お前こそ、誰だ。お城で見かけない顔のようだが？」

すると、その男はいきなり大声を上げました。

「くせ者だー！　であえであえ！　くせ者がお城に忍び込んだぞーっ！」

まあ、なんとということでしょう！　いくらひと月もの間留守にしていたとはいえ、お城に帰って来た王子をくせ者だなんて……。自分の顔を知らない家来がいたなんて、ニーダマもとんだ災難にあってしまったものです。

男の大声を耳にして、兵士や見張り番が続々と中庭に集まってきました。どうやらこれで、ニーダマのことをわかってもらえそうですね。

へつづく